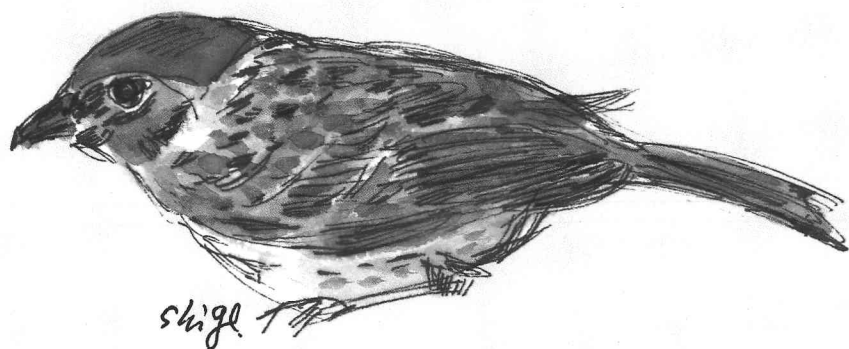


季刊 連句 第8号



季刊連句 第8号 目次

実花さんの思い出（南柏雑記6）	1
新連句「二十韻」の提唱	東 明 雅 2
二十韻 師走の町	捌・文 東 明 雅 6
牛耳傳（1）	杉 内 徒 司 8
春近き	捌 加 藤 K 文 井 手 樗 晴 10
「絶頂の城」付勝練習歌仙	12
下田実花追悼歌仙 二の酉	捌 井 手 樗 晴 14
二の酉	捌 川 野 蓼 艸 15
おもかげの	捌 秋 元 正 江 16
第十二回猫蓑会五歌仙 捌	17
角に箔	馬 場 彬 風 初 硯 吉 沢 てるよ 18
初御空	氏 原 正 雄 初 席 中 田 あかり 19
常盤木	坂 本 孝 子
質疑応答・連句ミニ辞典	20
連句会案内	21
雁帛往来	21

表 紙（雀）岩満重孝

実花さんの思い出

南 柏 雑 記 6

実花さんのおつきあいは、私が信州から柏へ出て来てすぐ、昭和五十五年十一月からであった。有楽町の「とん亭」で実花さんを主賓とする連句会が、徒司さんの肝いりで行なわれ、井手樺晴さん、岩満重孝さんなども加わって、今までにない華やかな会だった。発句を正客の実花さんにお願したところ、

盛り塩も冬めくものとなりけり

実花

と、即座に当日「とん亭」の囁目吟を出されたが、それがそのまま挨拶の句となっているところ、流石、新橋の俳句芸者として俳歴五十年に垂んとする名声に恥じない方と感心した。夕食時になって、「とん亭」の女主人入江たか子さんが挨拶に来られ、早速、名残の表の月に

月よりの使者を撮りしは月の頃

という句が入ったのも懐しい思い出である。

それから、たびたび御一座したが、昨年十月二十日、銀

座の「ギャラリー四季」から「山口誓子、下田実花俳句展」の招待状が届いた。そして、実花さんの筆で、「このようなことになりました。お知らせだけさせていただきます」と書いてあった。それで十月二十六日、会場に行ったら、たまたま山口誓子さんも来ておられ、実花さんは御家族やお仲間の新橋の名妓たち大勢に取りかこまれ、記念写真がばちばち撮られて上々の御機嫌だった。武原はんさんも来て、にこやかに挨拶しておられた。誓子さんと実花さんの関係は周知のところだが、この日の御兄妹はとにも最高の幸福にひたっておられたように思われ、私は実花さんのため嬉しかった。そして兄妹そろって食事に行かれたが、この食事をすませて帰って来て倒れ、そのまま聖路加病院に担ぎこまれたという。

「このようなことになりました」

という自筆のハガキの意味を私は改めて考え直すのだが、あの日の実花さんの幸せそうな顔が未だに目の先にちらついている。御冥福を心からお祈りいたす次第である。

新連句「二十韻」の提唱

東 明雅

連句の諸形式

私は昭和三十六年、連句に手を染めて以来、頑強に歌仙形式を固執して来た。これは歌仙という形式を正統のものと考え、また、歌仙一卷満尾するのに、時間的にも不便がなかったからである。

また、歌仙形式は二折で、表六句（五句目月）・裏十二句（八句目あたり月・十一句目花）、名残の表十二句（十一句目月）名残裏六句（五句目花）という、三十六句二花三月の形式であるが、表はおだやかに裏はそろそろおもしろく、名残の表にいたっておもしろさの限りを尽くし、名残の裏で静かに納めるといふ。この微妙なくり繰り変化する相が私を魅惑していたのである。

これは連句の他の形式と比較してみると、歌仙の優越性はさらに明らかであろう。まず、百韻はいかにも冗長である。天和・貞享のころ、芭蕉らがこの冗長さに飽き足りず、句数を殆んど三分の一に縮め、歌仙形式を採用したの

は当然で、その冗長さは一度実作してみられると、つくづくと実感できるところであろう。しかし、その冗長と感ずるのは、我々が歌仙形式に馴れているからではなからうか。西鶴以前の俳諧師たちは、百韻を定められた不変のものとして、冗長とも思わず興行していたに違いない。

それは歌仙形式に馴れて、その魅力にとりつかれていた私たちにもあてはまるであろう。私たちは歌仙一卷を平均四時間、急ぐ時は三時間、あるいは二時間で巻き上げるところも度々である。私の捌いた最短の記録は一時間五分というもので、これには多くの証人がおられ、作品もさほど悪いものとは思わない。現代生活のいそがしき、あわただしさから、歌仙一卷を巻く時間が問題にされる時、私たちはさほど切実に感じなかった。しかし、考えてみると、初心の方、ことにこれから連句に入ろうとする方に取っては、歌仙は四時間どころか、それこそ一日がかりの難行苦行で

あることは推察がつくし、今後、連句が飛躍的に普及する為には、やはりこのように短くする配慮が必要であることが段々分かって来たのである。

歌仙で長ければ、その半分で終る半歌仙がある。私どももしばしば半歌仙を手がけて来たが、これはどうしても中途半端な感じである。表六句と裏十二句これでは、序と破の二段だけである。そして、機会を改めて、この先を続けると、何か冷えきった御馳走をたべるような索莫としたものがある。これは折角、前回の盛り上がった気分が冷えてしまっているからであらう。

その他、歌仙より句数の多い五十韻・四十四・源氏（六十句）・八十八興（八十八句）・七十二候（七十二句）・長歌行（四十八句）は別として、古人の考えた短い形式として次のようなものが存在する。

1 二十八宿 二折（二十八句）

表六句 五句目月 裏八句 七句目月花

名残表八句 七句目月 名残裏六句 五句目花

2 簾 二折（二十四句）

表六句 五句目月 裏六句 五句目花

名残表六句 五句目月 名残裏六句 五句目花

3 短歌行 二折（二十四句）

表四句 三句目月 裏八句 七句目月花

名残表八句 七句目月 名残裏四句 三句目花

4 十八公 一折（十八句）

表十句 九句目月 裏八句 七句目花

5 首尾 一折（十六句）

表八句 七句目月 裏八句 七句目月

6 歌仙首尾 一折（十二句）

表六句 五句目月 裏六句 五句目花

7 表合 一折（八句又は六句）

百韻・歌仙の表のみ

8 三つ物 一折（三句）

発句・脇・第三

右の1から8までのうち、歌仙に見られる繰り返しと変化のおもしろさ、これを十分に發揮でき、しかも句数が適当なものとするれば、1と3であるが、1は歌仙より短いとは言うものの、殆んど三十句に近い。これでは歌仙と五十歩百歩の感を免れない。短歌行は簾と同じ二十四句だが、簾が表も裏も六句ずつでここに変化が見られないのに対して、表四、裏八の形式は変化が見られる。句数も二十四となれば歌仙の三分の二で、大分、短くなつて来ている。

しかし、更に句数を減ずることができないかと考えた時、簾と短歌行を組み合わせれば、効果的であることに気が付いた。

新しい形式としての二十韻

次頁の表が、私の考えた新形式の二十韻である。

名残の折	初折		(二十句)
	裏	表	
裏	表	裏	表
四句	六句	六句	四句
三句目 花	五句目 月	折立 月	(一花二月)

これだと、歌仙よりはずっと軽いが、半歌仙よりはやや重く、歌仙の重量感と複雑なおもしろみのある程度味わうことが出来る。

私はもともと、歌仙で最もおもしろいのは破の段で、しかも破一段・破二段と分かれているところに妙趣がこめられていると思って来た。それに対して、序と急とは、必要ではあるけれども、それほど凝ったものを見せる必要はないのであって、ことに序については、連衆の気分を鎮め、和をはかる効果は大きいけれども、発句と脇とは早速に手軽に運ぶべきだと思っている。芭蕉もこの考えだったことは、「発句と乞はば、秀拙を選ばず早く出すべき事なり。一夜のほど幾ばくかある。汝が発句に時をうつさば、今宵の会むなしからん。無風雅の至なり。余り無興に侍る故、

我発句をいたせり。正秀たちまち脇を賦す」とある有名な「去来抄」を読めば明らかであろう。第三は重い句なのでやや時間がかかるかも知れないが、四句目は軽い句がよいとされている程だから忽ち付くだろう。かつて私はこの「季刊連句」第三号で、歌仙一卷四時間説を唱え、表六句に三十分を配分したが、この二十韻の表四句は約二十分というところが標準であろう。裏六句と名残表六句には、それぞれ一時間ずつかけてゆっくり楽しみ、最後の名残裏にまた二十分かける。名残裏も、花の句と挙句とは、大体定まっているようなものであるから、さほど無理でもないとする、この二十韻一卷を首尾するには約二時間四十分位あれば一応できるのではあるまいか。

同じ「季刊連句」第三号で、草間時彦氏は「わたくしは連句は『一日がかりの遊び』と大悟徹底して、二時間や三時間の会でまとめようなどしないことにするか、さもなければ三時間でまとまる短い構成を別に考え、それを実作で試みることを提案したい」(同誌二頁「一日がかり」と言っておられ、私もこの御意見には大筋の点で賛成である。それなればこそこの二十韻の新形式も考えたのであるが、この新しい形式を、ある会の席で、隣りにおられた草間氏にお話ししたら、実は偶然にも草間氏も二十韻を考え、すでに作っておられた由をお聞きして驚きまた嬉しくもあった。ただ、草間氏の考えられたものは、総数は二十句であるが、四・十二・四と分けられていたそうである。だから、二十韻は私一人が考案したものではないが、四・

六・六・四と分けたところに特色があらう。

この二十韻は、式目その他、すべて歌仙に准じて興行される。ただ、表に月の座がないけれど、発句が秋の句の場合などは、遠慮なく引き上げて、すくなくとも、脇句か第三までに月を出すべきであらう。その場合は裏の折立の月が引き上げられたことになる。

歌仙の場合は一季表が嫌われるけれども、二十韻の場合には句数がすくないから、どうしても二季にしようとするれば無理が来る。それで、発句が春秋の場合は三句まで続けるは当然として、特別の場合の外は春、秋を四句・五句続けず、四句目は原則として雑とするのが無難であらう。夏、冬も二句止まりであらう。

恋は裏か、名残の表に一箇所が適當であらうが、これも時と場合により、三句離れてさえおれば、二箇所出しても構わないと思う。

人情自他・場の続きも歌仙と全く同様であり、内、外の配慮が望ましいことも同じである。

武翁賞作品募集

さらに、季の句・雑の句をあまり片よらないように出す

べきで、このあと、名残の裏五句目の月を雪にかえて、一年の景物を盛りこみ、この新形式の名称を雪月花と風流な名前にしようとする提案もあった。たしかに、五十韻という先例はあるにしても、二十韻ではあまり風流な名称とは言えないだらう。それで、私もいろいろ考えているのだが、たとえば、この新形式をはじめて実作した場所に因んで、「万代」というおめでたい名も候補に上ったし、(六頁参照)、あるいは四・六の形式から四六行、あるいは四六の裏に因んで、『筑波』というやさしい名も出るには出たが、『筑波』といえば、連歌の道全般を指すことになり、未だ決めかねている。さきに林富士馬氏考案の新形式六、十二、六は源氏第二十四巻に因んで胡蝶というやさしい名が付き、最近岡本春人氏によって考えられた十八句の新形式は十八夜に因んで居待という、これまた風雅な名が付けられている。二十韻でもよいのだが、お立ち合いの中にどなたかよい名前を付けて下さる方はないか。

武翁賞については、昭和五十九年度は残念ながら該当作品がなかったが、昭和六十年度的について左記に従って是非授賞に値する清新な作品があらわれるよう、待望するものである。

作品は歌仙または二十韻だが、そのやり方は自由とし、九月十五日までに呈出されたい。

二十韻 師走の町 東 明雅捌

ニコライの鐘も師走の旅籠町

冬の紅葉のまだ朱き庭

伸子張る縮緬のしぼそのままに

熱き洪茶に憩ふ一時

月の窓倚りて眺むる虫送り

厄日過ぎてても続く暑き日

茴香の実の香りよき海の紺

足をとられつ犬の綱ひく

留守番の婆に押しつけ置き藁

出戻り娘変へし髮型

十雨

明雅

和子

徒司

正江

江雨

和

同

江

江

東 明雅

岐阜の俳諧師国島十雨さんが、朝日カルチャー・センターの委嘱を受け、名古屋で連句の教室を持たれることになった。十雨さんとは旧い友達でもあるし、同じ朝日カルチャーの講師とされるからというので、杉内徒司さんの斡旋で、久々にお目にかかることになった。場所は神田の旅館「万代」で、ここは十雨さんの御親戚とのことであったが、震災・戦災をたえ抜いた建物の風格はすばらしかった。しかし、間もなく鉄筋の新しい建物に変わるといふ。

ぬめぬめと絹の靴下脱ぎすてて

燃え尽きてまた燃え上がる恋

重たげに外人墓地の夾竹桃

土用丑の日鰻丼の月

嘶家のいつも見なれしハンチング

キャッシュカードで出せぬ御祝儀

辛口の飛驒の地酒の鬼殺し

涅槃も末の頃の暖か

新連句発足祝ふ花の下

五雲を望む万代の春

昭和五十九年十二月五日首尾
於神田・旅館「万代」

連衆 国島十雨

式田和子

杉内徒司

秋元正江

古田悦子

悦子 雨

雅 司

和 江 司 和 雨 雅

いろいろな話のあと、一卷を楽しむことになり、私がかねてひそかに考えていた新しい四・六・六・四の形式でいかがと申し出たところ、国島さんから快い賛同が得られ、私が捌くことになった。一時過から始まって、五時すぎに満尾したから、正味四時間は、歌仙とあまり時間的には差がなかったが、しかし、句数が半分近いから、それだけ密度の濃いものになり得ているのではないかと思う。ともかく新しい連句形式としての二十韻、その第一作として、記念すべき作品である。

牛耳傳 (1)

杉内徒司

一

朝日新聞の懸賞小説に当選して世に出た作家は、戦後は三浦綾子（「氷点」）ひとりだが、戦前には数人いた。太田洋子（「桜の国」）、横山美智子（「緑の地平線」）と遡ってみると、第三回懸賞小説当選者に吉屋信子（「地の果てまで」）がいる。その吉屋信子の『自伝的女流文壇史』に彼女の前の当選作家の沖野岩三郎……という一節があるが、これは彼女の記憶違いである。

大正六年大阪朝日新聞が新社屋落成を記念した第二回小説の懸賞に、一等に当選した「明けゆく路」の作者は野村愛正であり、二位は沖野岩三郎（「宿命」）である。

因みに二等は七百元、一等は千五百円の賞金だったが、千五百円は何に使ったのですか、と私は大正十一年愛正と結婚したまつ夫人に伺うと「全部姉さんにあげて仕舞ったそうですよ」とやや怨みがましいような御返事があった。

姉文子は医師の夫が若死したので、大阪でお茶の修業を

して、東京へ出てきて細々と世帯を張っていたが、この懸賞金で高価な茶道具を買入れ、さらに茶道にいそしみ、裏千家総支配名取となった。名を宗古という。

吉川英治の年譜をみると、英治はこの宗古に茶をまなぶと誌されている。愛正のおかげもあってか、川口松太郎等の作家の弟子が多いが、佐藤栄作のような名士も弟子に名を連ねるようなその道の大家になったのだ。

二

野村愛正は明治二十四年八月二十一日、鳥取県岩見郡大茅村楠城（現在国府町）に生まる。

戸籍では「ちかまさ」と読むが、小さい頃から「あいせい」と呼ばれ、それを筆名とされた。

鳥取中学を病気のため中退。中学時代から新聞、雑誌に、作文、短歌、俳句を投稿していた文学少年。生れつき耳が大きかったので、牛耳という号をこの頃から使ってい

る。

近くの中学に白井喬二がいて、二人は投稿仲間として知り合い、生涯仲がよかった。

大正三年作家を志して上京、東京牛込通寺町の姉文字(秋山姓)宅に身を寄す。

昼は、化粧品やの「ホーカ液」、菓やの「わかもと」等の宣伝部に勤めながら文学修業に打込む。「明けゆく路」当選発表のすこし前、有島武郎のすいせんで書いた「土の霊」は、谷崎潤一郎、芥川龍之介等の作品とならんで、新潮社版芸術叢書の一冊になっている。

こうして一躍花形作家となった野村愛正は新しく勃興しつつあった映画界に身を投じた事もある。愛正が外国帰りの井上正夫のために書いた「寒椿」は、映画史上出演した水谷八重子(当時雙葉女学校三年生)によって有名である。少女役で出た水谷八重子が、後年大女優となったため、八重子の映画第一作ということになったからである。愛正は心不全のため昭和四十九年七月六日。八十二歳で死去。その葬儀に、大阪で公演中だった水谷八重子から見事な生花が届けられたのはこういう事情による。

また田中純一郎氏の『日本映画発達史』(中央公論版)には、日活向島撮影所時代の野村愛正のことが誌されているので、私は、家の光ビルで修した牛耳忌三周忌に田中純一郎氏をお招きして「映画人・野村愛正」と題する研究の御披露をいただいた事がある。

野村牛耳が信州伊那町の住人、根津芦丈にあったのは昭和十八年五月十六日、同じく伊那町出身の伊東月草亭における連句会の折である。この日の半歌仙二巻「葉桜」「麦の穂」は、芦丈の米寿記念出版『この一路』(昭和三十六年刊)に収録されている。

戦後の二十六年頃、海音寺潮五郎の家に、小説の勉強会がひらかれていた。集まる顔ぶれは野村愛正、小山寛治、中沢聖夫、綿谷雪、清水正二郎等であった。

海音寺潮五郎が後に、愛正の自伝小説『泉は放射線に流れる』に寄せた序文によれば次のようになる。

「私が連句に興味を持つようになったのはまだ郷里に疎開している頃であった。

あの頃はよく停電して夜が長く、物思うことが多く、不眠になやまされた。やがて連句というもののあることを思い出し、ひとりではじめた。

これには色々法則のあるらしいことは知っていたが、どんな法則であるかは知らない。新潮社の『日本文学辞典』で調べてみたが、書いてなかったもので、何やらで読んだ『即いて離れるものぞかし』という文句が胸のどこやらにあったので、それ一つを念じてはじめた。枕許に紙とペンとおいて、真暗な中で思いつくままに手さぐりで書いて行き、翌朝清書した。大体、一晚に十四五句出来た。三十六句で歌仙として一卷にするというほどのことは知っていた。五、六巻も出来たろうか。」

(つづく)

春近き

井加藤 榲 晴K 捌

井手榲晴

庭土の淡くしめりて春近き

煙のごとくに咲ける臘梅

粕湯酒酔ほのゝとめぐりきて

声色入りの小唄一節

焼け残る総三階の格子月

秋の夜長に蝶放ちやる

鳳仙花絞って人の爪に染む

七つ八つから肌の白き娘

NGを気付かぬふりのキスシーン

不意の囃子にしゃがみ込む犬

江戸っ子の気負ひを見せん夏祭

寄ってたかつて蛇叩きをり

厭離穢土六道無常月暑し

返すあてなきサラ金の利子

空き腹にポットの鳴りて疑はれ

綺堂全集手放せぬ母

寿と綴れに織りし花衣

光沢やはらかに椿餅あり

榲 隆 明 千 正 蓼 讓 麻 徒 彬
晴 秀 雅 町 江 艸 介 子 哲 司 風 艸 町 雅 秀 哲 江 雅

中座なさったK捌のあとを承け、俄にウラから重荷を負って、早春の半日汗をかくことになった。十指に余る手練れから矢継早に繰り出される句想は捨てるに忍びないものが多く「優に二卷分」とは師の断言である。それ丈の材料をアレンジしながらこうなったのは全く捌の不敏、御許し願いたい。
独り決めではあるが、連句は「複数人の唱和により七五のリズムに乗って、世態、人情を描く抒情詩」と合点している。それに「単純明晰な現代日本語を使い」を加えたい。
その点「不意の囃子」「蛇」「サラ金」「みちのく」「外の圃」などありがたかった。これで夜店のステッキになるのが食い止められたと思う。俗語を詩語に化した例ではあるまいか。それにしても「家普請を春のてすきにとり付て」「上のたよりにあがる米の値」「炭俵」を思い出すことしきりだった。
ヤマをナオにとヤマを張っていたところ略あたった。「流水」がその口火になった。こ

流水の便りを披く古机ナオ

モスクワ交渉ことし難航

チェス賭博琥珀大粒ネックレス

松坂慶子色香眩しく

恋の重荷綾の鼓を打ちつ老ゆ

一寸先は闇の鮫鱈

みちのくの冬冷えハと籠猫

待てば待つほど付句出てくる

振り向くと突然朱い大鳥居

ラケット抱へ学生の群れ

転勤の中年辛し月渡る

外の厠にやや寒の風ナウ

水甕の洒れて佗びしき湖の秋

逆しまに見る画家の写生画

胡座かき蔵に傀儡をく、りをり

雪蟲のあと追ひし故里

差し交はず花の枝より富士小さく
籠にあふれて春の椎茸

昭和六十年二月三日 首尾

於 関口芭蕉庵

町晴江 艸介 風 司 哲 秀 艸 麻 雅 艸 町 雅 江 風 介

こから五、六句の流には割に悪くないと思われ。唯「首かくす」を作者に御願ひして「絹の道」にしたものの忽ち前後で差し会い、結局「チェス」に落着いた。勿論、満点とは思っていない。

恋—前の部はざつかけないもの、ナオは王朝濃艶、この対照も助かった。よき恋句なき歌仙は下手な濡場の歌舞伎の如し。

近ごろノン・フィクション物がもてている。今更という気がする。連句こそその時代の庶民のノン・フィクションではあるまいか。さきの「米の値」を始め「七部集」にはいくらか見当る。そしてこの巻にも「水甕」やら「サラ金」やら例に事欠かぬのである。

「色歌歌仙」との指摘はあつて当然と思う。途中で気付いたものの、新米ドライバーの未熟さは生来の「色好み」が加速してブレーキがかけ切れなかった。また、数字だくさんなことも承知している。これも持ち前の図々しさを頼りに「八九間」の巻や「振売」の巻にも結構あるではないかと開き直っている。

絶頂の城

付勝練習歌仙

東 明 雅

投句締切

4月20日

絶頂の城たのもしき若葉かな

夏鶯のこだまする溪

枕蚊帳熟睡の夢の安からん

驟る番茶に茶柱の立つ

抄らぬ稿にしらじら月さして

新聞少年やや寒の道

通草の実供へてありぬ岐神

八句目

治定 嘘のキッスが本物となり

次位 旅の情とばかり思ひし

佳作 1 男波女波の騒ぎ戯れ

2 ひめごとをもち無口なる日々

3 懸想の文に猫の坐りて

4 夢の天女のふくよかな胸

5 ちらと白肌見えし露天湯

6 背負籠下ろして待つ間の一服

7 犬の匂ひの残る掌

8 桃割結びて面映ゆき頃

9 今さらどうといひたくもなし

和子	隆秀	一遊	青子	啓世	みづゑ	喜久子	麻子	東夷	孝子	昌子	貞子	たかし	隆秀	東夷	櫻晴	正江	蕪村
----	----	----	----	----	-----	-----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----

✓句はそれとなく、恋の呼び出しとなっている。しかも、表が割に丈高く、穏かであったから、折角、恋の句を出すならば、すこし変わった、刺激の強いものが欲しかった。嘘のキッスが本物となって、さてどうなるか。この次もおもしろい恋句が付けられる可能性があり、一卷に活気をつける意味で治定した。

次位の句は、岐神が道祖神だから、旅は付けすぎの感がないでもないが、表現に何か余韻があり、付け方によってはおもしろくなる可能性があるようなのでいただいた。

佳作の1は人情なしたが、付味はおもしろく、転じも利いている。2はよい狙い所をしたものの表現にもう一工夫欲しかった。3は人情なし。でもおもしろい光景を考えられたものだ。これも表現次第ではよくなる。4は四句前に五句去りの夢の字がある。5はどうも人情他のように見える。6は恋の情なく、どうも語呂が悪いようだ。7は直接恋の情はないが、前句に付けてみるとよく付いており、さらにこの句から、恋句へ発展させることもできよう。よい句であった。8の桃割は十代の未婚の女性の髪形である。前句にはよく付いており、恋の気分も上々であるが、打越の少年にやはりさわるのではないかと思われる。同年配、若さの打越というわけであろうか。9はまたおもしろい付句であり、ずうずうしいというか、開き直ったおもしろさがある。これならどんな句でも付くだろうし、おもしろくなる可能性は十分である。10もやはり若い人の恋の描写であろう。だから悪いというのではないが、恋句として

10 指切をした指のうづきぬ
11 覗き機関胸波立ちし

12 デートの刻は疾くに過ぎたり

13 夫婦財布に頭文字入れ

14 新婚の旅心うきうき

15 泪ひとつぷ嫁ぐときめ

16 のり巻弁当二人分持つ

17 酔のまはりし心やはらかに

18 ゆくりなく逢ふ幼馴染と

19 顔をかくして猫捨てて来る

20 君待つつらさ今も忘れじ

21 安定剤で癒えぬわづらひ

22 こけら落しの町の賑ひ

23 誰彼なしに頼む縁談

24 共白髪なる憧れの旅

25 問はず語り知れる同郷

26 身籠りしこと告ぐるすべなく

妙子

明哲

杉亭

たかし

千町

黄夜

あかり

淳子

蓼艸

正雄

貞子

力

榲晴

天留子

瑞枝

正江

前句が人情なし、打越が人情他の句であるから、今度は人情なしでもよいし、人情の句なら人情目の句が欲しいところであるが、よく見ると発句、脇がともに人情なしであるから、それに対して、ウラの折立と次のこの八句目があるから、人情なしが続くのも何かいやな気がしないでもない。だから、人情目の句がよく、それも、前句に岐神がある。岐神は道祖神で、信州などではよく男女の神像が彫つてあつたりなどして、縁結びに関係がある。要するに折立の、

は何か物足りなさが残る。11はまたおもしろいものを持ち出したものだが、何で覗き機関を見ると胸が波立つのか。それが前句とどう付くのか分からなかった。12もやや平凡である。13は一ひねりしてお賽銭を出す財布に目を付けている。14は付心はよく分かるがやはり表現にもう一工夫欲しい。15はその点で苦勞しており、付味も悪くない。16は恋の情はあるが薄い。17も同様である。18は幼馴染がやはり打越の少年にさわるのではないか。19は田舎道にありそうなおもしろいのが恋の情はない。20はおもしろい句で付味、転じともよい。しかし、一句の意味がやや不明瞭である。この人は現在を恋を得ているのか、失っているのか。その点が曖昧で、それだから反つておもしろいとも言えようが、『今も忘れじ』という表現が問題なのである。21は結局恋患いのことを言ったのだろうが、新しみがあつておもしろい。22は恋の情がない。23もおもしろい。道祖神の立つ村などには、よくこのように世話好きの人が居るものである。その点で付味は上々である。24はフルムーンの旅行か。14に似ているが14よりも工夫がこらされ、実感がこもっている。25は何か自分と新聞少年が同郷であることが分かったように感じられ、三句がらみの気味がある。26は付味、転じともに申し分なく、妊娠してそれを誰にも告げることのできない女性の悩みが同感される。一巡の關係で採れないのが残念であった。次句は雑の長句、人情の句で自他どちらでもよいが、新しい恋句を期待する。

下田実花

追悼歌仙

介した。実花さんははにかみつつも御満悦だった。

それから一年半、実花さんは小時さんの許へ旅立つことになった。

先き立ちて寒き黄泉路一人行く 誓子

実花さんのこと 井手樗晴

昭和五十九年十一月二十四日、下田実花さんが亡くなった。七十七歳。

五十八年の初夏―だったか―徒司さんがセカセカと私の勤め先の朝日新聞社に現れた。徒司さんのセカセカにはちっとも驚かないが、この日は朝日新聞の俳壇につく随筆欄の筆者に実花さんを起用すべく「共同謀議」しようというのだ。私も「実花登用」は考えないではなかったが、連衆を自分の関係している紙面にもってこようというのは何としても気がひける。しかし徒司さんなら立場が違う。渡りに舟で一も二もなく賛成して、その足で担当の浜川記者に「共同提案」に及んだ。

幸い氏は「ふみつづり」出版記念会の司会をつとめ、実花さんの散文力を熟知している人である。話は即座に決まった。

「随筆「身辺」が始まったのは七月三日付朝刊からである。実花さんは至って手のかからない寄稿者だったらしい。浜川氏を部屋に訪ねると、三回分位がきれいなゲラになっていた。締切りのずっと前に原稿が揃ったに違いない。私は二回ほど愚にもつかぬ読後感を実花さんに送った。「身辺」が五回で終わったのは七月三十一日付である。

八月に入って実花さんから葉書がきた。「身辺」無事にすみました云々、そうして

いちどきの七つ色咲く花火かな 実花
実花さんの俳友に竹田小時さんがいる。

小時さんを死病の床に見舞った実花さんの句。

水中花それもわからずなりにけり 実花
小時さんの辞世

くちなしの花一色に埋れたし 小時
である。「ふみつづり」出版直後、山本健吉さんがこの二句を併わせて週刊誌上に紹

二の酉 井手樗晴 捌

二の酉へ行きたく思ひ病床に 実花佛
ほころび初めし壺の山茶花 樗晴

細雪樹水と化して声もなし 徒司

眼鏡の玉を拭ふひととき 隆秀

漆地の手函に月の箔を置く 千町

鹿垣破れし廢園の寂び 司

口紅の乾くが早し秋の風 晴

秘めごとありていよよ薦たけ 町

傘雨への淡き縁を思い出に 司

海岸線の何処へでも延び 秀

マシマロに似たる雲なり旅の窓 同

青き鳥追ふメルヘンの城 司

文にやせ詩にやせ果てつ昼蚊帳に 晴

浴衣着流す大川の月 秀

お持たせの大福包みお隣へ 司

旨い安いで通る新店 晴

化粧傳とびとびに読む花の雨 司

春のシヨールに風の軽やか
賃借りの馬の歩みも長閑なる

途切れもせずに動く受け唇

泣きはらす眼に院・大のこれこれと

何かにつけて辛い中年

飲み過ぎのつひ権利書を網棚へ

いたづら好きの運命の神

影いつか一つになりぬ楡の下

子早いわよと感されてゐる

松明を掲げゆつくり大ボーゲン

齒に沁み通る谷の湧き水

真額の三ヶ月の傷売り物に

残る蚊払ひ賭博麻雀

空部屋の畳を踏めばうそ寒く

兄妹とも名ある俳人

金色の背文字かばそくふみつづり

くけ台出して替へる半衿

大賢は市に隠れて花を友

臍の路地を洩れる哥沢

昭和五十九年十二月二日 首尾

於 関口芭蕉庵

連衆

杉内 徒司

福井 隆秀

原田 千町

町司 町司

二の酉

川野 蓼艸

捌

湯のあとに発止と打ちし王手飛車
寄席の座蒲団色はとりどり

七首の一閃夜の花やつて

年の火を焚く杜のしづもり

ストールに顔を埋めて彼を待ち

合鍵返す神田明神

停年の燭となりたる望の月

秋の演しもの「人形の家」

公孫樹散る子規全集や古書祭

レモンスカッシュ甘く爽やか

ひととびにシソガボールの午後の雨

光りつつ行く銀輪の群

花明り面影の今透きて来よ

かぎろひの中足袋を干すなり

昭和五十九年十二月二日 首尾

於 関口芭蕉庵

連衆

秋元 正江

白井 嵯千

内田 麻子

久木田 朱美子

江

千

麻

千

朱

同

麻

朱

千

麻

江

江

艸

江

町司

晴

町司

秀

町

同

同

晴

同

同

晴

秀

晴

町

秀

町

晴

秀

二の酉に行きたく思ひ病床に

薄くらがりに浮ぶ石路の黄

寒晒桶いっぱいに氷りゐて

下駄の足音遠く小さし

ホテル白く岬に見えて月淡き

秋蝶追へばうねる群青

薄分け旅芸人の笛と犬

身も軽やかに曲はアレグロ

肩すかし受けたるあとのエアメール

蛇のうづまく髪を梳きをり

化粧して夏月の人舟で来る

四手の網を持ちて走る子

天井も黒くくすんだ里の家

猫もシヤクシもグツチ・セリース

何とまあお縄頂戴元刑事

金平糖に春愁を食み

阿騎野来て花降りかかる皇子の墓

巢立ちの声は山門の上

永き日の瓢の酒を酌み合ひぬ

浪人の髯をのばして

乗り換への駅の階段かけあがり

真先に読む株価情報

実花佛

蓼艸

正江

嵯千

麻子

朱美子

千

千

朱

千

江

江

艸

千

麻

艸

麻

朱

江

江

麻

江

麻

千

江

千

麻

千

朱

同

麻

朱

千

麻

江

江

艸

江

みたびの出会い 秋元正江

昭和五十九年十一月二十六日、沙羅の会が京橋公民館で最初の張行があり、この日は、実花さんの告別式の日でもあった。

昭和五十六年十一月、深川芭蕉記念館に於ける猫蓑第一回芭蕉忌に初めて捌く私の席に、実花さんが見えられた。『旅人とわが名呼ばれん初時雨』の脇起り歌仙の中に、
つめたき手もて菜をきぎむなり 実花
という句がある。なんと平易な表現の奥にひそむ悲しいまでのひろがりに、忘れ難い句のひとつとなった。初対面の実花さんは、もの静かで、距離をおいて心くばりして下さる方であった。

しぐれ忌の美酒掲げてきし名妓かな

正江

昭和五十七年九月、関口芭蕉庵に、かろやかなワンピース姿で実花さんは見えた。

秋めくや身がるになりしわが余生 実花
を発句に歌仙をまき、おしのぎのお握りを家で頂くからと気軽に手揚げに入れて帰られたのが、ほのぼのとした思い出として残っている。

夏服の筆の穂先に庵の風

正江

昭和五十八年五月、銀座『はく鶴』ではひよんなことでお会いました。もうお仕事をやめられたあとで、『明日から葬祭に行くの』と弾んだ声で、何かしら解放感がこちらにも伝わってきて、ずっと昔からの知己のように思えた。

銀座の灯あふひ祭を明日にして

正江

おもかげの

秋元正江 捌

おもかげのよぎるまなうら冴ゆるかな

手締めを音を偲ぶ山茶花

正江

洗張り布ひらひらと乾きぬて

明雅

湯量をほこる峽の隠し湯

てるよ

ほどもなく月光膝に及びたる

正雄

大皿に盛る秋鯖の鮪

孝子

松手入れすみて庭師の帰るらん

貞子

双児の娘ピアノ連弾

彬風

来る筈の吉報待つて気もそぞろ

司

世田谷に住み電話かからず

よ

コンタクトレンズ落してよりの仲

貞

麴なめて笑ひころげ

雅

さなぶりの神を送れば月出づる

鉄橋わたるブルートレイン

藍倉につづき味噌倉酒の倉

本堂でまく一夜二歌仙

折からの落花を髪にとどめたる

試歩早めをり春のうららに

猫の仔の鈴まですつけて貰はれし

志ほみ饅頭館の薄味

朝題目に夕念仏

くちなしに泣きし女の嘘哀れ

夢みごちに聞きし五月雨

南水洋鯨を追ひて日を暮らす

卵酒飲むぐちやぐちやの髻

子は頼るものに非ずとさとされて

孫十人と記念撮影

月明に高圧線の垂れて見ゆ

鉦叩き鳴く土間の片隅

焙烙にしめじぎんなん焼くる頃

弥次喜多旅行楽しかりけり

手荷物は箱根細工の小抽出し

ままごと遊び鳩のむれくる

花の山仁清の壺塗りつくす

拾着流し陽炎にたつ

孝 風 貞 孝 雅 孝 雅 孝 雅 貞 雄 同 雅 同 孝 雅 貞 雄 孝 風

第十二回猫蓑会五歌仙

去る一月十六日(水)文京区新江戸川公園・松声閣に

於て興行した例会の五歌仙は左記の通りである。

参加者二十五名。

角に箔 馬場彬風 捌

角に箔おきて乗らばや牛の春

爪音高き琴の弾き初め

寒の梅蕾ほのかに綻びて

カメラを据ゑる池の築山

見上ぐればピルの林にまろぎ月

すすめられたる鯨の鯨

沓脱ぎの庭下駄露に濡れそぼち

ひと夜の夢の未だ醒めざる

胸の底マグマの滾り熱き息

マリオネットの糸は切れたり

大学の百年祭を祝ふ町

先覚の像仰ぐ残照

外国に行く子見送る夏の月

冷房効きしダヴィンチ空港

「こゝは何処私は誰と」素来付
双児の娘顔を見合せ

簾糸ときてよそほふ花衣

神橋わたる春の爛漫

のびかけし芦の芽分けて残る鴨

裏の点前に正す居住ひ

ヤスの居る山荘今日の客は誰

よく似合ひたるアートネーチャー

いろはより教へし恋の道なれど

口紅引く指の少しふるへて

鍵さして眩きばかり鏡の間

枯鶯の唄よぎる黒猫

吹き竹で老婆種火をかき起し

縁日立てば綿飴を売る

水煙の天女唄ふか夕月に

ヘリコプターの黄葉散らして

同 稲架襖おそき昼餉の握り飯

喜 みちのく訛りの駅の放送

貞 優勝旗かかげパレード健児達

風 赤きワインを酌みて乾盃

遊 堀端の花九重に匂ひける

喜 数寄屋の門を東風の吹き抜く

遊 初硯 吉沢てるよ 捌

貞 初硯唐墨「如意」を濃く磨りぬ

遊 懸架菜に相応しき文字

風 ゆらゆらと雪吊りの松縄ゆれて

貞 運動靴を干す四ツ目垣

喜 月の出を後に集ふバーベキュー

貞 秘蔵の古酒の栓を抜く音

風 角切られ鹿さつぱりと奈良の町

遊 小指をたててこれでしくじる

貞 夷 夷 汀 雅 夷 夷

云ひわけの種も仕掛もだしつくし

与三郎とは違ふ与太郎

襲名の噂お金のことばかり

御神輿の渡御われを忘れて

お化け小屋夏の柳の月の下

「さきがけ」の待つハレー彗星

曆見る「さんりんぼう」で「仏滅」で

田楽の味噌少し辛すぎ

野点して幕の内にも花吹雪

空にふんわり春の浮雲

抱卵期魚島蛙は目借時

杜甫と李白の素読百遍

意地を張りぼつくり寺にかよひつめ

着ぶくれ爺は迷子札さげ

紫の帯縮匂ふ中年増

覗きばかりか置引もして

負け癖のつきたる犬は尾をはさみ

酎ハイいっき巴里祭に酔ふ

救急車むやみに呼んで叱られる

教育ママがかぶるストレス

ニューファッション竹下通り照らす月

触るるもの皆夕べ露けき

虫の鳴く厨守るは老ひとり

武漢三鎮兵の古傷

ラーメンの新開店の列につく

子 ぶらここ揺らし孫と競争

雅 花の雨陶片の散る窯場跡

子 山それぞれに笑ひをるなり

汀 初御空 氏原正雄 捌

雅 初御空太古の藍をたたへたる

夷 遠く聞ゆる追羽根の音

子 ざざ虫を土産に学生戻り来て

雅 灯の明りさす奥の六畳

夷 湖の面濡らしてさやか夜半の月

雅 野塘蒿の叢を分け入り

子 濁酒を下げて演歌を低声に

夷 田舎ピンクのブラウスの女

子 びつたりとバイクの彼にしがみつ

雅 四面佛在る台北の街

夷 徴兵の若者集ふバナナ市

子 埃積りし時計ネジ巻く

汀 凍豆腐下る軒先月射して

夷 北しぶきつき帰る狩人

子 ステレオのポリウム上げて無我の境

夷 きよろきよろとして蜥蜴出てくる

雅 花ふるや和蘭陀坂の甃

同 古草を踏み不気味なる井戸

子 ぶんわりと春の手袋膝に置き

夷 鳥居の下で鳩と遊ぶ子

汀 いつしかに聖徳太子あなくなり

よ 思ひがけない便り届きぬ

夷 さり気なく話しかけし旅の方

病床の鏡の中で 猫の目

正 日照雨に似たる一日の恋

正 グッピー殖えて槽の濁りぬ

江 デパートの屋上老人多くなり

子 他所見してゐる子につき当る

哲 駒下駄のひびく路地裏月織く

江 新蕎麦の香の暖簾よりもれ

江 秋翳にわが来し方の重なりぬ

江 不意に聞きたる夜の鶏

江 朝まだきレイアウト組み橋渡す

江 王子の電車一つ残りて

江 花万朶たこ焼の店館の店

哲 陽炎あそぶ丘の合唱

江 初席 中田あかり 捌

初席や剣のさきの独楽の彩

哲 屠蘇の機嫌に声高の客

江 桜鯛おどる如くに串打ちて

江 麝香揚羽の髪をかすめる

江 門閉ざす蔵の上なるおぼろ月

江 雨催ひして土匂ひ立つ

江 住所録電話の傍に忘れ来し

麻 子

哲 子

同 子

江 子

哲 子

江 子

麻 子

哲 子

江 子

江 子

麻 子

哲 子

江 子

麻 子

哲 子

江 子

哲 子

江 子

麻 子

江 子

江 子

隆 子

千 子

瑞 子

枝 子

枝 子

幼な顔して秘めごとの数

ふたつ文字牛の角文字アマリリス

虹消えてよりこころ空しく

猷体の落語家の骨もどりしと

堆朱の根付け引出しの中

月出でて一氣に筆を走らす

愛ましき小鳥の巢箱つくらむ

友と行く獵釣り用意ととのひき

真珠母貝の眠りふかぶか

莊周の夢や現や花の苑

押せばじわりと春のカステラ

遍路宿小切れを入れし古行李

祖父の残せる手帳出できぬ

三日坊主三月三年あきつぼさ

ハレー彗星待たるこの頃

薄青き氷河は崩るどよもして

「子を取ろ子とろ」すさぶ北風

初恋の彼に会ひたる同窓会

掌に入る程の下着まるめる

死ぬなんてそれをいっっちゃおしまひよ

世界時計の針は伯林

白き猫ひっそりとあて後の月

露とは消えぬ己が罪障

若さなりやこそ「一世風靡」

遠すぎも近すぎもせぬ旅の空

産土神に賽銭をあげ

水ぎわをふちどる花の屑つまむ

蒲公英皿に遊ぶままごと

路上で演じるおかしな歌手達の一団。大道芸の原型を感じる。

同 秀

常盤木 坂本孝子 捌

常盤木に鳥啼きとほる淑気かな

窓よりもるる弾初めの琴

寒見舞母にこまごましたためて

はや昏れなづみ点す電灯

薄野にあまねく照らす望の月

地芝居を打つ稽古念入り

榎櫃酒をひと息にのむ男衆

手相を見るとそつと掌に触れ

身重かと思はれることの恐ろしく

眞金使ふ歯医者者はびこる

神戸ならデリカテッセン・トアロード

つば広帽にふるる子燕

月仰ぐ思ひ／＼の桜桃忌

寝息やすらか蚊帳の中より

老らくのカラヤンの振るレスピーギ

髭面ながらシャボン玉吹く

夕影のただよひ来たる花の丘

お遍路さんを遠く見送り

今宮のやすらひまつり鬼踊る

団十郎の逆さ口上

金融の自由化賛否両論に

闘汁の中泳ぐ大鳥賊

笹鳴か足音ひそめだしゆく

聞き耳立ててはははは覗き見

撓やかにうち重なりし白牡丹

ふと消されたるスベードの6

鳥葬の人にカムリン手向けたり

帆船を鳴らす風の身に沁み

水底を出でし古壺歪む月

角切る鹿は柵に追はるる

茹で栗の湯気大まかに箆にあけ

家事怠けたき主婦ここにあり

赤子でも次郎兵衛といふ系譜にて

柱に著るく残る疵痕

風狂の夢は果てなし花ごろも

後姿を濡らす春雨

*鳥人骨製の笛

久

青

久

秀

世

青

孝

世

同

青

同

同

久

同

青

同

青

久

孝

久

世

青

世

久

質疑応答

異支体・同字別吟越不嫌

問 A 七首の一閃夜の花八手

年の火を焚く杜のしづもり

ストールに顔を埋めて彼を待ち

このような場合、字だけから言えば、手と顔とが打越となります。花八手は植物ですから構わないと思いますが、やはり手の形をしているからこそ八手と名付けられたのだと思います。「花やつで」とすべきか、それとも平仮名にしても駄目なものか、如何でしょうか。

問 B 四手の網を持ちて走る子

天井も黒くかすんだ里の家

猫も杓子もグッチ・セリーヌ

この場合、子の字が打越になります。「同字別吟越を嫌わず」ということを聞きました。

しかし、同字三句去り（厳密に言えば五句去りでしょうが）ということになれば違反ということになります。同字別吟ということで、三句去りから、特別に除外されるか否か、お伺い申し上げます。

（調布 川野夢卿）

答 このような去嫌に関するさまざまな疑問を解くには、芭蕉ならびにその門流が実際にどうやっていたかを知ることが一番参考になります。原田曲斎（一八一七—一八七四）の「貞享式海印録」には、芭蕉の歌仙の用例を帰納的にまとめ整理してありますので、これを用いるのがよいと思います。

A の場合は、字だけから言っても「異支体越不嫌」という項目にあたりますし、ことに花八手は支体ではなく植物ですから、このままで打越にあっても許され、「花やつで」と書く必要はありません。

B は明らかに「同字別吟越不嫌」の項目にあたりますから、これも許されます。

このように「貞享式海印録」が現在では頼りですが、これとてもすべてが正確・妥当というわけではないので、現代連句としては、これから周到に芭蕉の真作品を検討し、その結果に基づいた現代的規範を早く作る必要があるかと思っています。

問 朝日カルチャー・センター（A・C・C）の「連句実作入門」講座について、

その実際、ことにカリキュラムについてお教え下さい。

（東京 山本五郎）

答 A・C・C のこの講座は、毎月第二・第四水曜の午後一時から三時までで、二時間のうち一時間を講義、一時間を実作にあてています。講義のカリキュラムとしては、1 発句と脇、2 第三、3 表六句、4 歌仙・二十韻、5 恋句、6 月・花、7 式目、8 七名八体、9 八方自他伝などが主で、その他連句の歴史と諸派、三物・百韻、文音のやり方などについての講義も適宜予定されて、一時間ずつの実作とともに、半歳で連句を一通りマスターできるようにになっています。入会は何時でも自由ですが、四月から新学期が始まりますので、その時入会されるのが最も適当だと思います。（東明雅）

連句ミニ辞典

一句一直 いちごういち

元々は千句興行の際の掟の一つで、指合のある場合、一度だけ直して出すことが許されることをいうが、普通の会においても、宗匠が連衆の句をその席上、あるいは校合の場合、添削する場合にも一直という。

連句会案内

。連句教室 会費千円

日時 第一日曜日午後一時―五時
会場 関口芭蕉庵

文京区関口二ノ十一ノ三

(電) 九四一―一四四五

。A・C・Cゼミナール

日時 第二・四水曜午後一時―三時

会場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター

新宿区西新宿二ノ六ノ一

(電) 三四四―一九四一(代表)

入会金 五千円

受講料 一万一千四百円(三ヶ月)

二万二千元 (六ヶ月)

。猫養会(会員制)

年四回

(二月 四月 七月 十月 第三水曜日)

会場 松声閣

文京区新江戸川公園内

(電) 九四一―九六四九

雁帛往来

▽明雅師は二月十五日渡米ロスアンゼルスに赴任されているお嬢さんの御家庭に滞在され三月四日帰国の予定。

▽美濃派の国島十雨宗匠御指導のACC名古屋「連句講座」は一月十七日から開講された。受講者は十四名。

▽電通連句会は五十九年十二月二十一日、ならびに六十年一月二十五日と電通南寮で興行。近頃は明雅師の代わりに馬場東夷氏が捌きをつとめ時間の関係で「二十韻」を

その都度、首尾している。一昨年十一月発足以来、すでに満一ケ年を越えたが、新しい人の加入もありいよいよ盛んである。

いざさらば雪見にころぶところまで

耳たてひよいと白き野兔

動物園人氣はコアラのみにして

まんじゅう売りの欠伸つきつき

満月にバス待つ列の静まりぬ

護美箱の底こほろぎの鳴く

長き夜の辞書を片手に書く手紙

池田理代子になるなとさとし

▽一方、馬場彬風氏の指導しておられる興

流連句会は、田原節郎氏を中心に主として興銀OBの方々の会であるが、この会も熱心で、最近は「二十韻」を採用、こちらは二回に分けて満尾しておられる。左は六十年一月十七日興行の一巡。

白醴と孫のぬくもり初詣

新春祝ひ集ふ同胞

大屋屋根鳩なく声もやゝ訝えて

樺の梢にかゝる夕月

閑に任せ旅を楽しむ夜長なる

秋袷脱ぎ帯も捨てられ

音もなく消えし障子に写る影

信太の森の狐たづねよ

清 和治 閑堂 卓三 節郎 堂 同 彬風

「季刊連句」第八号定価五百円

誌代 年二千元(送共)

発行 昭和六十年三月一日

編集・発行人 東 明雅

季刊「連句」発行所

〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二二

電話 ○四七一(七五)一一九二

振替口座 東京七―五二二二三三

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都豊島区高田一ノ六ノ二四

電話○三(九八六)一七一―一五

